

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鎗木町 198-3
電話 (043) 485-1801

故郷 ふるさと ふたつ----- 富田 美千子 とろくすん と あちやさん---- 溝上 純義
スローペース----- 都築 洋子 最近の旅行----- 戸田 千香子

あめ 飴を買う女

金親 邦行

「飴を買う女」あるいは「子育て幽霊」は日本の民話で日本各地に伝承されています。

この話は、子供を身ごもつた若い女性が亡くなって墓に埋葬されたあとで出産し、子供を育てるため幽霊となり、埋葬された時に持たされた六文銭（三途の川の渡し賃）を持って青白いやつれた姿で毎晩飴屋に水飴を一文買いに来たが、七日目にはお金がなくなつてしまい飴屋に水飴を恵んでもらい、その後子供は墓から助け出されて後年立派な僧になつたという話です。

この話は死んで幽霊にまであつて、自身があの世に行くための渡し賃まで使つて、子供を育てようとした母の愛の深さを説いています。

「飴を買う女」は墓にまつわる話ですが、昔は土葬も多

く、墓の土の下には故人がいるという実感が深く、ほとんどの場合が火葬の現代の墓とはかなり異なるようです。現代ではこのような幽霊が出てくるのも難しくなつてしまいました。

私がこの話を聞いたのはかなり昔の、子供の頃でした。その後忘れてしまつてしましたが、学校の英語の講義で小泉八雲の『怪談』（日本の怪談を英訳し出版した作品）の中の「雪女」を英文で読んだ時に、同じように母と子供についての民話に「飴を買う女」という話があり、やはり小泉八雲が別の本で紹介していると教えられ、十数年前の遠い記憶が蘇りました。

「雪女」は、木こりと結婚し子供が何人もいたが、美しくいつまでも若かった。しかし子供を置いて去らねばなら

なくなり、夫に子供をよく育ててくれと厳しく言い残して去っていくという話です。「雪女」は絵本にもなり多くの人に知られています。

小泉八雲（パトリック・ラファディオ・ハーン）はギリシャで生まれイギリス、イギリス、アメリカを経て来日し、高校、大学で教え日本人の小泉セツと結婚しました。父はアイルランド人、母はギリシャ人であり両親は彼が幼い頃離婚しました。彼はアイルランドの父方の親類に預けられ、母はギリシャに帰り父は再婚しました。その後彼は不遇で貧しい青年時代を送つたと伝えられています。日本では明治の頃で、海外に行くには船という時代で両親にもなかなか会えなかつたようです。

幼い小泉八雲を残して母親はギリシャに去りましたが、彼は「飴を買う女」を紹介したあとで「母親の愛は死よりも強い」と書きました。

（編集委員）

ふるさと 故郷 ふたつ

「布団着て寝たる姿や東山、三方をなだらかな山々に囲まれて：」この句は服部嵐雪の京都の風景を詠んだ句です。

私はこの風景に囲まれて育ち、子供の頃は方広寺の鐘つき堂の石段に座りおやつを食べたり、鬼ごっこをして遊んだりしていました。また建仁寺の境内を走り回ったりして過ごしていました。

少し大きくなって、豊臣秀頼が作らせた方広寺の鐘の文字が、大坂冬の陣の口実となったと知りました。また建仁寺も鎌倉時代初期の木造建造物であり、こんな歴史に囲まれた街で育ったことを、この年になって改めて感慨深く思い出しています。

今はこの地佐倉に住み、早や30年。この佐倉にも、縄文時代の井野長割遺跡や上座貝塚の遺跡があり、縄文の昔から人が住んでいた事がわか

ります。また本佐倉城跡、臼井城跡や佐倉城跡等の史跡も多くあり、京都と比べるまでもなく歴史に囲まれた街で、私にとつてはこの街も、大事にしたい場所です。

たまに法事やクラス会等で京都に帰省すると、綺麗な町並やゆつたりした人達の対応や会話を耳にして、郷愁を覚えます。そして、たまに会う友人達との会話にすんなりと京都弁を使っている私がいま

す。

「故郷は遠くにありて思うもの：」といいますが、佐倉も、京都も私にとって故郷であり、遠くても近くても大切に思いたい土地です。

激しい波に流される事もなく、平穩無事に過ごしてこれた事に感謝しつつ、今の佐倉の生活を楽しみたい。そしてここが「終の住家」となりそうです。

(上志津 富田 美千子)

とろくすん と

あちやさん

●とろくすん

五木寛之著の『百寺巡礼』の中に長崎「興福寺」に行き、住職の松尾師に「とろくすん」という、皿に盛られたインゲンの煮豆を食べさせていただいた“ということが書いてある。

このインゲン豆とは隠元禅師が日本に持ち込み普及したもので、そのような呼び名が

されているとのことである。

隠元いんげんりゆうぎ隆琦を、中国から日本へ最初に招聘したのは、長崎の人びとで隠元は承応三年(1654年)に渡来し、最初は興福寺住持として、しばらく滞在していた。本の編集部注記に(この豆は十粒並べると六寸 \parallel 18 χ になることから名づけられたという)。子供のころ聞いた「とろくすん」は、「十六寸 χ 」のことだったのです。

●あちやさん

「あちやさんピー、太鼓も持

ってドン」とは子供のころ何度か聞いたことのあるフレーズであり、これも前記本の長崎「崇福寺」に出てくる。「阿茶さん」とは江戸時代に唐人屋敷の中国人を長崎の人は「阿茶さん(あちらの人のことか?)」と呼んだそうです。唐人屋敷は入りが厳しく規制されていたそうですが、中国人が建てた崇福寺、興福寺、福濟寺(現在はない)に中国人がお寺(墓)参りをすることは大目に見られたようです。

いつもは屋敷に閉じ込められていた中国人は遠足気分で行列をなしてドラや太鼓を鳴らし参拝したのではないでしょうか?この様子を評して長崎の人たちは「あちやさんピー、太鼓も持ってドン」といったのではないかと思います。

中国人が行ったお祭りも「あちやさんピー、太鼓も持ってドン」だったかもしれませぬ。60年余り過ぎて、ことばの理解が出来た気がしました。

(染井野 溝上 純義)

スローペース

我が家からはバスの便がない某スーパーへ、健康の為に散歩をかねて時々歩いて行く。約二十年前に引越してきた頃は三十分以内で着いたと思うが、今は四十分程かかるだろう。次第に疲れてくると、「足を一歩前に出せば一歩近づくと」と自分に言い聞かせ歩く。いつも朝だからか、会うのは十人に満たない。車道に出ると、ひっきりなしに車が通る。車社会を実感する。

際、ぼつぼつ体を動かしていると、一日で意外と多くのことが出来る。つつじ数本が咲かなくなつて何年かそのままにしていたのを、処分することにした。それ程大きくない株だが、連日の炎天で土が硬く、一本でも時間がかかり、その日は掘り出せなかった。根がビクともしないのだ。空いた穴にバケツ一杯の水を入れた。土を柔らかくする算段だ。その後他に色々と用事があつたが、毎生水を注入した。六日目だつただろうか、中断していたつじの回りの土を少し掘つていたら、あつけない程スポットと抜けた。焦らず、小さな工夫をしたお蔭だ。

上は大学四年生から下は中学三年生の三人の孫達が、祖母のスローペースな生活をどのように見ているだろうか。私自身は結構気に入っている。

(白銀 都築 洋子)

最近の旅行

私は旅行が大好きなので、友人と三人で毎月出掛けています。今回は熱海に行きました。熱海と言えば、昔は新婚旅行のメッカでしたが、その後新幹線が開通したり、海外旅行へ行く人も多くなり、観光客も減りました。でも最近では東京から近いこともあり日曜日などは老若男女であふれています。

澁淵とした若者の楽しそうな姿を見ると、こっちまでが楽しくなるので、そんな若者が沢山歩いていて熱海は好きな観光地です。

今回の熱海旅行の日は暖かかったので、海岸通りをたわいのないお喋りをしながらウォーキングをしました。老女子会ならではの楽しい一日でした。

話は変わりますが、入学のはじめ頃、講義の日に聞いた先生の言葉が思い出されます。

(上志津 戸田 千香子)

「あなた達は過去が長く、未来が少ない」と言われ、我が身を顧みて「健康に気を付けて一日一日を大切に過ごそう」と思いました。年齢も自分で決めれば(五十、六十まだ蕾もつともつと元気で過ごせると思いました。

旅行は足腰が丈夫でないと出来ないし、楽しくないので夕方一時間程歩いています。今は寒いので、家の中で階段を上ったり下りたりしています。

最近では観光目的ではなく、気の合う仲間と一緒に楽しむ旅行になっています。この自由も夫が健康であればこそいつも感謝しています。

これからは梅、桜を始めとして、花便りが次々と届くようになりそうです。皆様も心をパツと開いて、仲間と旅行に行きましょう。

6月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL: 043-485-1801 FAX: 043-485-1803

〒285-0025 佐倉市鐺木町 198-3

E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp

URL: http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集し、市民カレッジ情報コースの卒業生が文字入力を行っています。

さくら道

佐倉市から16号線、柏イン
ターから4時間かけて福島県
いわき市にやってきました。
東日本大震災の日から4年が
経ちます。復旧は長い道のり
であること、特に風評被害は
水産食品メーカーにもおよび
皆さん苦勞しておられます。
一日も早く、いわきの美し
い海が帰ってきて、風評被害
のなくなる日を願わないでは
いられません。震災の年、以

前お世話になった食品会社の
会長の奥様が、脑梗塞で倒れ
車椅子の生活を送っているこ
とからお見舞いに伺いました。
震災の当日は自宅1階の天井
まで津波が押し寄せたそう
です。幸い奥様はデイスーパー
の日で助かり、会長は2階で
津波が引くのを待つて一命は
取り留めたという、お話を伺
うことが出来ました。一日も
早い復旧を心よりお祈り申し
上げた感謝の一日でした。
(田中 豊作)

あとがき

先月、幸運にも皇居吹上御
苑自然観察会に参加する機会
に恵まれ、行ってきました。
吹上御苑は、昭和天皇の御
意向により、武蔵野の自然の
復活を意識し、自然のままに
残され、自然状態の武蔵野の
植物の移植の実施など、以後
70年余りを経て形成された野
生種中心の森林です。
御苑の中は、大部分がスダ
ジイ、アカガシ、モチノキ、

イチヨウなどの巨木が茂る深
く暗い森となっています。温
帯地域では珍しいスタジイの
「板根」が見られました。
御苑中央部には、クヌギを
中心とした里山的でやや明る
い森の存在も確認できました。
水辺では、東京23区内から
はほぼ絶滅したと考えられる
コサナエ（トンボ）を発見。
都心にあり、多様な生物を
はぐくむオアシスのような存
在を体感できました。

(鶴澤 和良)